幼稚園の先生が話すことば（1）

村石昭三

1　ことばのモデル

子どもはまわりのおとなとの生活交渉を通して生活習慣を身につけるが、ことばも生活習慣のひとつの型として子どもの中にしつけられていく。ことばは慣習的なものであるから、両親や教師との言語交渉、またマス・コミとの接触という生活習慣のくりかえしが学習の必要条件になるけれども、そこにことばの生活習慣のモデル（型）のような、子どものよりどころとするようなものが提出されればその学習はいっそう効果的である。

子どもは教師のことばを正しいと思いこんでいる。

教師のことばは子どもにとってことばの生活習慣のモデルになっている。またなるべき役割を持っている。

教師のことばの役割をこのように考えていくと、モデルとしての規範性が要求され、しつけとしてのことばづかいが強調されることになるのは当然であって、「教師のことばは子どものことばに反映するのだ」ということが理論づけの軸になって展開する。

ではいったい、モデルとしての規範的なことばづかいとは何かと問われたとき、社会一般が使う標準語なのだという回答ですむことであれば話はたいへん簡単である。以前の学校教育では子どものことばをおとなのことばにふりかえていくのがことばの教育目標にあがったことがあった。教師はいつも標準語を使って子どもに接すること、方言はよくないことばとして方言を消していく過程が標準語の教育と考えられた時代もあったと聞く。それにくらべれば、いまはもっと子どもに流動的に地域社会の方言も使わせ、方言の理解を深めながら標準語を考えさせる指導が行なわれている。

幼児教育でも、理念的には標準語の指導をするという姿勢をもつことがよいと思われるけれども、幼児であるだけにおとなの標

準語の語りかけには受け入れてくれない場合もある。そこで標準語教育が強調されたころの幼児教育では、むしろ、話しことばの充実というよりも、おとな、子どもということばの違いの少ない、あいさつ、返事、おわびなどといったしつけにつながることばの習得を指導目標の中心においていた。ところが、現在はそういう「しつけ」に偏した考え方はしなくなって、もっと日常的なことばのやりとりを充実するという方向に保育する場が移ってきたと私は判断している。そこで、戦前、あいさつを頂点とする「ことばのしつけ」に正当化しえた保育の過程が、今はそういう正当化する目あてを失ってしまって、そのために、教師がふだんなにげなく使っていたことばづかいに大きな関心が向けられるようになったのであるが、さて、その教師のことばづかいの特徴とはいったいなんであろうか。

2　相手呼称・敬語の使い方

教師のことばづかいに対する世間の評判はかならずしもよいとはいえない面もある。いわゆる「幼稚園ことば」というものはこれを子どもに反映させ、子どもの中に入れていくモデルとして適当かどうかを問題にしているのである。

しばらく前、教師のことばについて、相手呼称と敬語の使い方のアンケートを幼稚園教師として勤務しながら大学、教員養成所に通う人たち、一二一名に求めたことがあったので、その若干の結果を紹介する。参考までに彼女たちの教職経験年数はだいたい、二年以内ということであったから、いわば新人教師たちと考えてよい。

・幼児への呼びかけ

(問) あなたが姓名を知らない他の組の男の子にどの組かをたずねる時は？

幼児への呼びかけ方を調べたのだが、約半数の者が男の子にボクハドノクミ？　という聞き方をするという。さすがにボウヤハというのはなかったが、ボクがいちばん多く、ついでアナタ、キミという順である。

本来、ボクは男の子の自己呼称であるが、母親が子どもに自分のことを「オカアサン」、あるいは「ママ」といい、教師が自分のことを「先生」というのと同じで、子どもの立場にふりかえた表現である。しかも「ボク」には子どもに対する親愛の情が成立の根拠になっているというので、これを「親愛語」という。

呼び方	人数	%
アナタハドノクミ	46	38.0
キミハドノクミ	14	11.6
ボクハドノクミ	54	44.6
ボウヤハドノクミ	0	0
アンタハドノクミ	1	0.8
その他	6	5.0

現在の共通語には、女の子にはアナタと気軽に言えても、男の子には言いにくいし、キミといえば何となくはすっぱな語感がつきまとうものである。以前に行なったNHK「ことばの誕生」の研究調査でのアンケート

にも、女の子は早くアナタということばを習得するのに、男の子の方は適当な呼びかけ語を持たないため発達がおくれることを確めることができた。

（問）保育中に、自分の組の子どもを呼ぶ時、男の子（ヤマダイチロウ）には？　女の子（ヤマダハナコ）には？

子どもの呼び方はサンづけか、クンづけかの話に関連させて調べたものであるが、この結果では、①男の子にはクン、女の子にはサンという使い分けがある。②サンという呼びかけはチャンづけをする。③姓名のうち、名まえだけ呼ぶのがたいへん多く、姓だけというのはいちばん少ないとなっている。

①の傾向は小学校的な使い分けである。小学校では女の先生が男の子を呼ぶとき、クンづけ呼びをするのは不適当でないかという声があるけれども、それは女の先生としてことばに女らしさを欠くことへの心配である。幼稚園の教師の場合には、相手が幼児であるからそういう心配は出てこないようである。

男の子

呼び方	人数	%
ヤマダクン	10	8.3
ヤマダイチロウクン	9	7.4
イチロウクン	64	52.9
ヤマダサン	0	0
ヤマダイチロウチャン	0	0
ヤマダイチロウサン	1	0.8
イチロウチャン	34	28.1
その他	4	3.3

女の子

呼び方	人数	%
ハナコチャン	90	74.4
ハナコサン	7	5.8
ヤマダサン	5	4.1
ヤマダハナコチャン	5	4.1
ヤマダハナコサン	10	8.3
その他	4	3.3

②、③の傾向は小学校とは異なっている。子どもがことばを習得する過程では、まず自分の名まえを覚えるのが先で、姓は集団生活で他人との区別がはっきりするようになってから意識されてくる。文字の習得も自分の名まえを覚えてから姓に及ぶのだから、小学生と違う③の呼び方には根拠がある。②のチャンづけも、クイズ式にいえば、「人間の中でチャンと呼ばれるけどサンとは呼ばれないのは」赤ちゃんなのだから、それが人間最初の呼び方としてはかなっていると思う。なお、姓を呼ばずにハナコチャンとだけいうのには、ボクハドノクミの表現に共通した「親愛語」としての含みがある。

もともと、子どもに聞かせることばには、呼び方にかぎらず、モデルとしてのことばづかいが適切に与えられているならば、ふだんは幾通りもの使い方をすることがあってよい。たくさんのことばのレパートリーの中から、的確な言い方の系をつくるのは子ども自身の力で行なう。これがことばの学習の本筋だと思うから、呼び方を一つに決めるのがよいとは思わない。採否を決めるのは使われる場面であり、子ども自身なのである。

・オのつくことば

（問）保育中、子どもとのことばのやりとりで、次のようなオのつくことばを使うものを○でかこんで下さい。

「幼稚園ことば」に対する世評を決定的にしているのはオのつくことばの使いすぎである。これについて私の手許に日名子太郎氏の「いわゆる〈幼稚園ことば〉について」（雑誌「言語生活」115号所収）という、よいエッセイがあったので、氏があげた具体的なことばの例からいくつかを選んで調査した。問題は文の形で「**オ部屋**ニ入リマショウ」というように提出したが、若干のものをのぞいて使われ方がたいへんな高率である。

これらのうち、オ休ミ、オ部屋、ゴアイサツ、オ帰リ、オテアライは、幼稚園ことばの固有のものでなく、女性一般にみられる使い方である。そして敬語の種類では、相手の行為に結びつけて使えば尊敬表現になるが、子どもを相手に使うものであるし、教師が自分自身のことばづかいをきれいにみせるという成立要素があるので特にこれらを「美化語」という。

もっとも、「オ帰リ」は一般と異なり、「オ帰リノ時間」とアクセントの位置を変えていう点で幼稚園特有のいい方であるが、特有なという点では、オ絵カキ、オ集マリ、オハジマリといった動作表現を縮めて名詞化したものや、オ椅子サンといった擬人化表現、オテテといった幼児語表現があげられる。擬人化、幼児語表現の例は使用率も低く、教師にもだいぶ抵抗のあることを示しているけれども、オ絵カキ等の名詞化表現は幼稚園以外には見られぬ不自然な語構成であるにもかかわらず、保育活動を端的にあらわす専門用語になりきっているという点で、これをなくすることは容易なことではあるまい。

単　語	人数	%
オ部屋	114	94.2
オ帽子カケ	32	18.2
ゴアイサツ	107	88.4
オテアライ	104	86.0
オ休ミ	115	95.0
オ帰リ	106	87.6
オ絵カキ	86	71.1
オ集マリ	87	71.9
オハジマリ	35	28.9
オ椅子サン	15	12.4
オテテ	45	37.2

「幼稚園から小・中・高に至るまで、一般に女の先生のことばに「お」を使いすぎる傾向があるから、その点、注意すべきであろう」この文章は昭和27年4月、国語審議会が「これからの敬語」に書き連ねた一節である。が、当時から17年もたった今の方がむしろ必要とされる文章ではないだろうか。

・園外の人に対することば

（問）外部から園長の在、不在を電話で問われた時の答え方は？

その時、不在であることを告げる時は？

教師が敬語表現の使い方にけじめを持っているかどうかを知るには、園外の人に対して身内の者をどう呼ぶかを調べるという方法がある。このアンケートの被調査者たちの93％が「園内では園長センセイ」と呼んでいるが、外部からの電話問い合わせには表にみるごとく、70％の者が、「園長ハ」と答え、またそれに合った述語表現をとっており、公共の職場における応答はそれで十分である。

また、アンケートの別な質問項目からは、子どもの母親には尊

呼び方	人数	%
エンチョウハ	85	70.2
センセイハ	1	0.8
○○センセイハ	2	1.7
エンチョウセンセイハ	30	24.8
その他	0	0

述語文	人数	%
イマセン	3	2.5
オリマセン	24	19.8
オミエニナリマセン	7	5.8
イラッシャイマセン	22	18.2
イナインデス	1	0.8
不在デス	61	50.4
その他	3	2.5

敬表現でもって接するが、その母親から幼児に関する問い合わせ「うちの子どもは食事をすませましたか」があった時には「食事ハスミマシタ」と答えるという結果が出ていて、一部に問題にされる。幼稚園教師は母親に対するとき、園児の行為表現に必要以上に敬語を使いすぎるという傾向は見られなかった。この種のアンケートには実態よりも価値意識を伴ないがちであるが、少なくとも使い方のけじめは十分に持っていると考えてよいであろう。

3　ことばづかいの幼児化現象

こうしてみると、教師のことばづかいで問題になることはなんであろうか。園外の人に対することばづかいには適切な敬語の使い分けにけじめを立てている教師なのに、こと子どもとのことばのやりとりでは男の子をボクと呼び、チャンづけの呼びかけをする親愛的な表現、それに「オ」をつけた美化語を必要以上に多用する点にアンバランスを感じている。それでその問題の発生が子どもとのことばのやりとりの場にあるところから、私はこれを教師のことばづかいの「幼児化現象」と指摘する。

この幼児化現象は、教師がなるべく子どものレベルにおろして語りかけてやれば、心が通い合い子どもの重い口はほころび、子どもの中にことばの系ができあがっていくと考えるからであるならば、もう少し、子どものことばのレベルをあげるために、子どもに反映させる教師のことばづかいの役割を考える必要があるのではないだろうか。かつての保育が考えたような、標準語と行儀的なことばのしつけをめざしたモデルにかえるというのではいけないが、生活的なことばの力を自分でつくらせていこうとする保育の中で、教師のことばがいぜんとして親愛語と美化語でつづられているというのは少しものたりない気がする。

なお、国語審議会が教師のことばに苦言した「オ」のつけすぎは、尊敬表現の多用ということとは意味が異なる。社会の人間関係図が複雑になってきているので、敬語の使い分けはたいへんむずかしくなってきたけれども、それだけに正しい敬語の使用が教師に望まれるところである。そういう大切な努力を放棄して、ただ「オ」をことばのはしばしにつけてすまそうとしたり、それでことばづかいが美しくなったと錯覚したり、「オ」をつけることが唯一の敬語表現の道だと考えているとすれば、これは考え方の幼児化現象である。

（国立国語研究所）